キョン×長門　雛祭りネタ

舞月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョン×長門　雛祭りネタ

【Ｎコード】
Ｎ０８９０Ｏ

【作者名】
舞月

【あらすじ】
三月三日雛祭り、キョンは我らが団長・涼宮ハルヒの命をうけ、長門と共に雛人形の檀を買いに行くのであった。

3月3日、雛祭り。
俺は我らが団長によって発案された雛祭り計画の雑用係として長門宅にきていた

「飲んで」

長門にお茶を出され、飲む。
この作業、初めて来たときを思い出す。

「で、長門、相談なんだが・・・」
「言わなくても解る、内容は雛人形について」

言わなくても解ってくれていたらしいが、少し違った。

「いやな、人形はあるんだが……飾るための物がないんだ」
「……」

そう、雛人形はあるんだが、それを飾る壇がない。
因みに、この人形は古泉の知り合いから仕入れたものである。
まったく、どこからこんなもの持ってくるのか知らなかったが、ある意味いい迷惑だった。

「解った、構成情報を理解し、それで作れば良い」
「いやいやいや、流石にそれはダメだ」

長門が情報操作をしようとしたところで俺が止めに入る。

「いや、買う予算はあるんだ。でも意外と最近いろいろバリエーションがあってな？
それで、一緒についてきてもらいたいって事なんだ」
その言葉に、長門は少し考え、「解った、一緒に行くことにする」
案外すんなり通ってしまった。
と、言うことで、俺達は雛壇を買いに行った。

ひな壇だけ売っているところなどそうそうないだろうが、
古泉が事前に調べておいたらしく、数店舗見つかっていた。
案外近くに、だ。
俺がどこに行こうか迷っていると、長門が
「ここがいい」
と指を指して指名していた。
珍しいことなので、長門の言うとおりのところに行くことにした。

長門の選んだ店はかなり安かった。
これは長門が仕組んだのか偶然なのかは知らないが、コレはいいことである。

「長門、どれがいいと思う？」

俺が長門に聞く。こういうものは素直に女性に聞くものである、と自分で解釈している。
長門は周りを見回し、いろいろな壇を見始めた。
平安時代風、鎌倉時台風、江戸時代風、と壇にも様々な種類がこの店にはあった。
しかも全て屏風絵入りという代物。
かなりの傑作ばかりなのに一高校生が買える値段なのでかなり嬉しい。

少したってから、長門が動きを止めた。

「これが良いと思われる。
情報にあった人形とこの屏風絵、そして壇の数が丁度いいように彩られる形になる」
「へぇ・・・あれで解ったのか、長門」

実は、この店に到着する前に少し人形の特徴などを話しておいたのである。
俺はその壇の値段を見る。
…うん、この値段なら余りが出るくらいだ。

「すいません」

俺が店員さんに声をかけると「なんですか？」とすぐに小走りでこちらにきてくれる。

「あの、コレください」
「解りました。少々お待ちください」

店員さんはそういうと、店長らしき人を呼び、壇を慎重に箱詰めし始めた。
一つも傷をつけないようにしてくれるので、ハルヒを怒らせずに済むものだ。ありがたや、真面目に
その間、長門はじ、っと俺を見つめていた。
まるで何かを伝えたいかのように、である。

「ん？何だ長門」
「そとの気温が低下中、このままだと手がかじかむ」

長門はそういうと、俺の手を握ってきた。

「ちょ、なんだ？」

「こうしておけば、暖かい」

そう言って、長門は手を離さない。

仕方なく、俺はそのままにしておいた。

その後、箱詰め終了後、代金を払い、箱を持ち上げる。

壇が軽いせいか、かなり軽い。

しかし一人で持つには少しバランスが足りない。

「長門、手、離してくれるか？」

俺の言葉に、長門は、首を横に振った。

「私も持つ」

そう言って、長門は俺と対になる形で箱を持った。

余計に軽くなる。

負担が少ない分、体力の消耗も減らせる。

なので、俺はそのまま学校へ歩いていった。

「へぇ～……さすが有希ね！ちゃんとしたもの選んでくるじゃない！」

本当に外は寒かった。そして、着いてから俺たちが壇を取り出すと

開口一番言いやがった。

俺にはなんの礼も無しですか、はいはい、どうせ過ぎた夢ですよーだ

「なによ、キョン、そんな嫌そうな顔して。
なにか具合でも悪いの？」

珍しくハルヒが俺を心配してくれている。
一応元凶はお前なんだがな？ハルヒ

「だ、大丈夫ですか？キョン君」

朝比奈さんが俺を心配する。
なんだろう、こういうときは返答したくなってしまう。

「朝比奈さん、俺は一応元気ですよ」
「なんで私には礼がないのよ？」

ハルヒがムスっとした表情で俺に言う。
さっき俺に礼を言わなかったのはどこの誰だ、と俺が突っ込みたくなる。

「はい、出来ましたよ」

古泉がいつのまにか人形を飾り終えている。
この間、約3分、仕事が速いとはこのことである。

「……こんど、また、どこかへ行こう」

長門が俺に言う。
前に図書館につれていく約束もしたまま終わっていない。

「ああ、わかったよ」

俺は長門と指きりげんまんして約束した。

そのバックにある屏風には、とある少年に似た王子と、とある少女に似た姫が同じように約束事をしていたとさ

（後書き）

私が今年の3月に書いたものです。嗚呼、二年前のことと思っていた……

感想、お願いします。

それにしても改行多いなぁ^^；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0890o/

キョン×長門　雛祭りネタ

2010年10月10日07時16分発行